

築地兩國

泉鏡花作

一

オルガンに合はせる讚美歌の勘所と言ふ、但し絲切齒を外れた聲で、

「エホバ、エホバ・・・」と一ツ小さな咳をして、大きな其の前髪の下から、對手を流眇と視つたのは、通言老嬢と云ふ、當代の大難物。臺の立つた大年増。首に捲いたヴェール、持物の蝙蝠傘、信玄袋、薄汚い白足袋に空氣草履、金の蒔繪櫛と名づくる前立ものに到るまで、近頃流行の小道具を、混雑に透間もなく犇々と身に鎧つたは天晴候。が、肥つた腰の緊り悪く、裏搔くばかり膝を開けて、緋の唐縮緬の凄まじさ。揺絲の紅も、慙くては長屋の洗濯である。・・・此の人、右の片手だけは、蝦蛄の剥身と言ふ指に、延のと、玉入のと、孰れも擬ものゝ指環ニツ。で、故と手袋は嵌めざりけり。

さて、乗合の、―― 電車は築地兩國行。

お堀の松に、眞蒼な三日月で、土手の柳は朧に白髪を亂す。が、電車の中は蒸すばかりの人の呼吸。丁度日の暮れ間際、其の立籠む事例に因つて一通りでない。それ、揉合ふ、押返す。――其の中で、説教を聞かされる。――對手は、肥つた此の嬢の膝と、尖つた半外套の肱との間に、へし潰たやうな古い鳥打帽を、ぐしゃ／＼と耳まで被つて、頸に萌葱の風呂敷包を、ト掛けて、咽喉で結目を垂りとした、脊の低い十三四の小僧なのである。

何の因果か、のめずり込みさうに、頭を低れて、手首を脇の下へ、かじかまつた體で聞くのを、黄色い頤で覘込んで、

「……ですね、エホバですね、エホバは神なり、又眞の智慧なりと言ひましてね、智慧でいらつしやる、眞正の、純粹の、結晶した。」

と句を切り、句を切り、拍子に掛つて、黒の信玄袋の端で、件の指をピリ／＼と弾いたり。

「混合のなアイ、（と引張つて）智慧、即ち

其そのものであります。かうして、ですね智慧ちを。

「

と言いふ時とき、三宅坂みやけざかで混雑こんざつしたので、又咳またせきをして置おいて、少時しばらくして、

「智慧ちをですね、求もとめるには何どうしても神かみに便たよらなければ成なりません、でせう。エホバは神かみなり、眞しんの智慧ちなりですからね、可ようございますか。お前まへさん方がたの年とし紀ころでは今いま智慧ちを求もとむる、要えうする、欲ほつする盛さかりでせう。ですから、其その智慧ちをですね、智慧ちを求もとむるのに、間違まちがつた、迷まよひ、汚けがれたものを求もとめては成なりません。眞しんの智慧ちでなければ不い可けませんよ。其その眞しんの智慧ちは、エホバの他ほかにはないのです。可ようございますか、ねえ。」

と頤あごを出だして念ねんを入いれる。

「え。」と、滅入めいつた、元氣げんきのない聲こゑは、眞まう俯向つむけに成なつた小僧こそうが鳥打とりうちの裏うらに潜もくる。

「ねえ、分わかりましたか。」と最もう一つ。

「へい。」と鼻はなを舐なめたやうな返事へんじをする。

嬢は、意を得たりと言ふ態度。此處で一寸、肌襦
袢を二枚襲ねた、青黒い襟を扱いて、脂切つ
た、・・・其癖、食物の悪さうな顔を、正面に
擡げて、乗合をづらりと視めた。

又乗合の方でも、居周圍でエホバの聲の些とでも
届いた連中は、一同申合はせたやうに此の豫預言者
の廂髪を見た。

―― 彼等の或者は、故と横外方に仰向いて、或
者は故らに引傾がり、或者は額に皺寄せ、頤を撫で、
目をばちくりなどして聞いて居たが。

中に一人、纏れた島田に、平打の銀簪、年紀より
は色の質素な、黒縮緬の羽織を、ぞろりと、・・・
・コオトなしで襟許の媚かしい、二十ばかりの姿
の可いのが、紫の風呂敷包を、柔かに肱に掛けて、
雪の腕を提革に、薄が靡く夕日の袖口、ちら／＼揉
まれながら、すらりと立つて、熟と耳を澄ましたの
が、此の時、横を向いて、婀娜に莞爾。

電車が二臺ばかり、ぱツぱツと光を吐いて来て擦違ふ。
崖は暗く、濠の霜は白かつた。

何分にも、先づ其の緋唐縮緬を、と乗合は思ふのに、嬢は襦が上に最一つ其の衣紋を繕ひ、膝を開け、「其からですね、え、天國は隠れたる寶なり。」と呂の音で強く壓し、「隠れたる寶なり……ですね。珠、黄金。」と右手の其の指環に觸れつゝ、指の節を膨らして、「皆、しかし顯はれた目前ばかりの寶なんです。……眞の寶、隠れたる寶は、天國なんです。天國ですよ。けれども結構、其の寶は、唯今お話ししたですね。……エホバ、知つて居ませう、……神様、天と地と……三位、一體の神様の、其の智慧を拝借しないでは、私どもにわりやうがないのです。

寶は誰でも欲しいです。隠れたる寶は尚ほ見たい

です、ね、然うでせう。」

寒げな小僧が、聲を頸窪に滅入込ませ、

「へい。」

「ですもの、其ですから、我がエホバに縋らねばなりません、神を頼まねば成りませんのよ。私どもはね、熱心に、其は一身を捧げて、神に使へ、神に學び、神を信じて居るんです。――神と言つて、偶像や、お札やなんか、そんな小兒だましの玩弄物とは違ふんです、エホバの神ですよ。」

お前さんもね、眞の智慧を授りたい、隠れたる寶を得たいと、――又思はないものはありませんね――ですから、然うお思ひでしたら、教を聞きにおいでなさい。小兒對手だつて、何だつて、忠實に、共に研究するのよ。……エホバの神の事ですもの。」

山の手の……教會でね、木村ひさ子とお聞きなさい、小使でも誰でも知つて居ますからね、私の内へ來ても宜しい。が、まあ、教會へおいでなさい。其の時話しますから、木村ひさ子ですよ、木

村・・・・」

と口で言ひながら、指の先で、信玄袋の縁縫ひの唐草の上へ、指で ・ と続けさまに二度書いた。

革に縫つて、稍打傾くまで差覗いた、婀娜な島田なのは、睫毛の濃いのをばつちりと、瞳をニつて、分らぬ符牒に驚いた風が見えた。

乗合の中には、さてはエホバの智慧と言ふのは、羅馬字の事が、と思つたのが居る。

電車は蒼白い月の、櫻田門の停留場の、赤い灯を、血の流るゝが如く、颯と開めき過ぎた。

「おゝ！」

と嬢が思出したやうに、

「お前さん、又何日と言はないで、私と一緒に日比谷へおいでなさらんか。此の凄いやうな、清らかな月の光、朧保羅に（クオーバズ）と仰有つた時のやうな、神の靈光を拜んで、一緒に祈禱を捧げませう。音楽堂へ行つて。・・・若いね。牧

師の方が待つて在らつしやるのよ。新しき御弟子を
一人連れて行つたら、どんなにお喜びなさるでせう。
神の導きよ、……お前さんも幸福だわ、おい
でなさい、え、おいでなさいよ。」

「へい、」と小僧は突のめるやうに叩頭をして、

「へい……又……」

「ではね、……教會で木村、宜しいね。」

「何だ、何だ。」

「掏摸だ、誰だ。」

「耶穌が掏られたんだ、時計だだよ。」

「あゝ、今下りた、——隠れたる寶ぢやねえ

か。

「顯はれたる禪だらう。」

と車内では哄と云ふ。

嬢は、夕刊の中を、慌てた挿畫のやうにくる／＼廻る。

築地兩國と書いた車掌臺の巻布の、其の築地、とある文字の上へ、銀の平打を抜いて、人知れず一寸當てゝ、ト其のまゝ、ぐい、と鬢のほつれを掻きながら、押上る警官の肩の下を、鼻筋の通つた横顔で、島田の一を澄まして下りる、とくる／＼と風に捲かれながら、公園の入口で、振返つて、掲示標に並んで、月にすつくりと立つたと思ふと、人群集の外へ消えた。

「おや、小僧さん。」

「姉さん。」

と築地橋を渡らない、本願寺寄の左の袂で、墨繪のやうに落合つたのは、前刻の小僧と娘である。

其處におでん屋の荷もなかつた。

が、二人、遠い灯にも忍び合ふ風情で、鬢のほつれの白い頬がちら／＼するのと、黒い天窓が鼠の如く川を背後にちよろ／＼するのみ。

可懐い、優しい聲がひつそりと、

「よく、此處つて事が分つたわね。感心。」と

頷くらしい。

氣競つた調子で、

「築地へ簀を橋に掛けりや、お前、分らねえでさ。其の位な事は分らねえで。」

「仕事は出来ないとお言のかい。」 「うむ。」
と言つたが、少し悄氣る。

「まあ、可かつたわね、危い事。」

「あの、エホ婆々、下りると直ぐだもの。あんなに早かあ氣が着くまいと思つて、すっかり油斷したつたから、だらしがねえ。難有う、姉さん、へい。」

と叩頭をする。

「其處は神様の智慧だとさ、ほゝゝ。」

と蓮葉に笑つたが、忍び音で、

「兄さん、お前は何處だえ。」

「私あ深川です……へい、姉さんは。」

「つい、お鄰さ。」

「あ、本所かい。」

「おや、洒落てるよ。」

と軽く、小僧の肩を弾いて、

「久しく？」

「え、否、まだ新米で。お説教を聞くやうな厄雜

です。へい、姉さんは。」

「可哀相に、私や……ぢやないんだよ。で

もまあ澤山は違はないね。」

今日はね、此でも暮のね、眞面目なお墓詣の歸途さ。善い事をしたか、そりや……何だつけね、

と・・・・エホバの智慧でないから分らないけれど、悪い事をしたか、・・・まあ、お前さんの爲には成つたのね。だがね、堪忍しておくれ。預つて上げた、あの銀時計は打棄つて来てよ。

餘りお間だわ、あんなものは縁起が悪い。私もね、寒いのに御苦勞様な、出来心さ。あの厭味つたらしい婆さんの對手は、どんな奴だらう。・・・冷かして遣らうと思つて、――盗られた、抜かれ たつて騒いでる隙に、一人で音楽堂へ出掛けたの、公園の。――

錢のなさうな、ひよろついたハイカラが一人、空を睨んでるぢやないか。お月様も災難つぢやない。

澄まして挨拶をして遣るとね、誰方、かなんて色目を使ふから、隠れたる寶ですつて、然う言つてさ、・・・餌も何にも要りやしない、ダポ鯨は直ぐに引懸つてブル／＼さ、お前。

息ばかり荒く成つて、脈の沈んだ情ないのを、ぶ

らり／＼と銀座まで、手巾の尖に振提げて歩行いて
来たがね、投げて遣る烏も居ず、面倒くさく成つた
から、大時計の下でお然らばさ。其の時機、生意氣
な！ 地獄へなんか手出しをしないでよく神様をお
拝みよつて、銀時計を投げて遣つた、發奮さ、・
・・折角、お前を待たして置いて。」

「構やしません、何、銀なものか、ありや二ツケ
ルですよ、そんな奴が持つたんぢや私だつて汚らは
しい。」

「掏摸、・・・太い！ ウ、又。」
と唐突に、角の軒下から腕を伸ばして、娘の袖を
引掴んだのは、銀座でまいたと言ふ青年の牧師であ
つた。

其の手を拂つた、掌で、鼻から目へ、小僧が、
ざらりと逆撫でに撫でたので、ハツクサメと手を離
す。

唯、カグリ下駄の音を立てた、と思ふと、築地橋

の、あの欄干の上を、小刻みに、カタ／＼カタ、頸
の風呂敷包が、霜夜の星へ、宙を飛ぶ。羽も生えぬ
に、這個！ 小天狗。
呆氣に取られて牧師が見る間に、梅の薫をほんの
り残して、娘も柳に隠れたのである。

【完】